

コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方

會田 宏¹⁾

I. はじめに

2013年12月から日本コーチング学会機関誌「コーチング学研究」の投稿規程および投稿の手引きが改訂された。その具体的な内容は、コーチング学研究第27巻第1号(2013)において、関子浩二(筑波大学体育系)編集委員長(当時)によって詳解されている。この改訂において、私は次の2点に注目している。1つは、実践報告、すなわち「コーチング学における種々の問題に対して、現場で実際に行った事例として正確に記述し報告したレポート」が新たな論文の種類として加わったことである。もう1つは、原著論文に事例研究、すなわち「コーチング学における種々の問題に対して、事例をもとにして、新規性と普遍性の高い原理や原則を明らかにし、コーチング学の発展に直接的に寄与する論文」が含まれたことである。私がこの2点に注目した理由は、日本コーチング学会が「実践現場で起こった具体的な事例を科学的に検討し、コーチの学びに生かす」とあらためて主張していると感じたからである。

本稿では、まず、コーチングに関する理論知を明らかにする研究がコーチの学びに十分貢献していない理由を述べる。次に、コーチングに関する実践知を事例として提示することがコーチの学びに有用である理由を述べる。最後に、コーチングに関する実践知を対象とした実践報告や事例研究を学術論文として執筆する際に、その科学性を保証するための手続きとまとめ方について述べる。

II. 理論知の偏重がもたらした実践現場と研究との乖離

スポーツやトレーニングの実践現場で起こっている現象は、主に理論知として体系化されてきた。動作に

関してはバイオメカニクスの方法によって、身体の組成や機能に関しては解剖学的、生理・生化学的な方法によって、心理特性に関しては心理学的な方法によって、いずれも「どうなっているのか」が「観察者の立場」から詳細に説明されてきた。このような理論知を導く研究のほとんどは、現象を数値に置き換えて表現する量的研究である。そこでは、多数の標本を収集して得たデータの共通項を事実として提示し、その事実が母集団に共有されるものであることを統計的に表現することで、一般性、普遍性を示している(鯨岡, 2005, pp.44-45)。しかし、本来、複雑な相互関係が入り組む実践現場で起こっている現象について、条件を統制して実験的に調査したり、細分化して数量化したりすると、具体個別の持つ生き生きとした様相や豊かなアクチュアリティは「厳密性」と引きかえに断片化されてしまう(鯨岡, 2005, p.21)。また、共通項から遠いデータは「誤差」として切り捨てられてしまう(鯨岡, 2005, pp.44-45)。

これらのことは現象を客観化してとらえるアプローチだけでは、スポーツやトレーニングの実践現場のリアリティが反映されないことを示している。理論知の偏重は結果として「コーチや指導者の学びとそこから生まれる実践知は、研究者が獲得する科学の知とはかなり異なる」(関子, 2012)、「科学的」研究によって得られた知見を実践に応用することの困難さから、基礎研究と実践現場の間に距離が生じてしまっている」(坂入, 2011)との指摘につながっている。実践現場に生きる私たちは、理論知の詳細な提示によって運動がわかったような気にならないように「行為者の立場」から現象を眺めることを常に自覚しなければならないであろう。

III. コーチの学びとは何か

優れたコーチは、選手やチームに対して合理的な指

1) 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sports Sciences, University of Tsukuba

導を行うために、対象や対戦相手の現状を把握し、目標を設定し、目標を達成するための手段を準備し、練習を計画し、実施し、評価するというプロセスを実践している。コーチング活動は、条件が統制できる実験室ではなく、さまざまな条件が複合的にからみ合う現場で行われる。そのため、コーチングにおいて直面する問題の多くは、個別的で、複合的で、再現性に乏しい(村木, 1991)。また、コーチには、因果関係が複雑に絡み合ういくつかの選択肢の中から、限られた時間の中で、「正解」と事前に断定できない1つを選択し、実行していく「不確実さの中での素早い意思決定」が迫られる。コーチング活動は、このように、コーチのきわめて高度な創造的な能力が要求される実践的・包括的な活動である(會田・船木, 2011)。

現場のコーチを支えるこのような知は実践知と呼ばれ、個人的、経験的な知識、柔軟で不定形な知識(ベナー, 2004, p.178)である。実践知は「前回ほうまくできなかったことが、こうすればうまくいった」などの個別の実践に根づいており(金井・谷口, 2012)、より難しい状況や類似した状況に転移できる(楠見, 2012, p.44)。この実践知を深め、広げ、コーチとしての熟達をきわめて行くことが、コーチの学びであると考えられる。

実践知の獲得には、省察が重要な役割を果たしている(楠見, 2012, p.48)。省察とは、自己の経験を振り返り、教訓を引き出す思索である。実践と省察を繰り返す、コーチングに関する実践知が各自の持論として形成される。この持論が形成される学びの過程は、通常、自覚されることなく、暗黙的に行われる。

IV. コーチングに関する実践知を事例として提示する意義

私たちは、コーチとして競技力を向上させることが期待されている。また、同時に、コーチング学を発展させる研究者、後進を指導する教育者としての役割も持っている。選手が将来この領域に携わりたいと思えるように、質の高いコーチングを行い、コーチングに関する実践知を多くの人たちが活用できるように、後世に残していかなければならない。知は、人にわかる形にすることで受け継がれる。そのため、暗黙知のレベルにとどまらせてはならない。

コーチングに関する実践知を事例として提示することは、2つの意義がある。

1つは、コーチとしての自己の学びに役立てられるという意義である。普段、無自覚的に行っているコーチング実践を他者に伝わるように整理し、記述することを通して、コーチ自身の学びが活性化し、実践と省察のサイクルを加速させることができる。具体的な方法としては、個別の対象へのコーチングをじっくりと見つめ(内省し)、そのコーチングの中で知として伝えた方がよいテーマを見つけ出し、そのポイントをはっきりと描き出す方法が有効である。この方法は、研究のために特別な介入や実験・調査の計画を必要としないために、研究者でもあるコーチにとって実践と研究の両立に最も適した、無理の少ない方法である。西條(2007)は、体験者の「内的視点」からの記述は、読者がそのやり取りを追体験する形で少しずつ理解を深めていけると指摘している。また、浜田(2007)は、「〈生きるかたち〉を渦中の視点から記述し、たぶんに錯覚をかかえた日常の見かけをそこから捉えなおすことができるのなら、それもまた十分に意味のある学の営み」と述べている。さらにNicholls et al. (2005)は、意味を把握するには、行為者の世界の内部に入り、行為者の立場から世界を眺める必要があると指摘している。これらのことは、コーチが自らの内省を手がかりにコーチングに関する実践知を提示するという研究手法の有効性を支持するものである。

もう1つは、他者の学びに役立てられるという意義である。経験的学習において、熟達者の持っている実践知は、語りを通して理解すると身につきやすい(ベナーほか, 2005)。また、事象への密着性、情景の表象化可能性、意味構造への接近性という基準から見ると、事例的な研究は価値が高い(鯨岡, 2005, p.40)。さらに、個別の事例研究から帰納的な推論を経て導き出される運動理論の果たす役割は極めて大きい(村木, 1991)。これらの指摘は、コーチングに関する実践知を他者の学びに生かせるように提示するためには、個別事例を記述し解釈すること(実践報告)、個別事例の特殊な具体的様相を読み解きながら、事例に共通の構図、他の現場にも通じる普遍の構図を明示的に描き出すこと(浜田, 2010)、すなわち「対象チームや選手が違って共通すると思われること」を示すこと(事例研究)が重要であることを示している。一人のコーチが経験できるコーチング実践には限りがある。実践報告や事例研究は、コーチの実践と省察のための貴重な情報となり、他者のコーチング経験を補ったり、深めたりすることができる。

V. 実践報告と事例研究における科学性

実践知のような、量的な指標が存在しないものを対象とした研究に、質的研究がある(無藤, 2004)。質的研究の利点は、調査された人々の考えや体験、またその行動の背後にある論理を全体的に「理解」し、データに根ざしたかたちで新しい概念や理論を「発見」できるという点にあり、質的分析で生成された概念や理論は日常生活や現場などの「現実」に密着している」という特徴を持っている(小田, 1999)。質的研究はさまざまな学問領域において行われている(小田, 1999)。なかでも、医学、看護学、教育学においては、実践に従事する医師、看護師、教師の語りや対話を手がかりに、実践的能力の改善に有用な知見がもたらされている(斎藤・岸本, 2003; ベナー, 2004; 秋田ほか, 2005)。質的研究では、事例研究をはじめとして、インタビュー、エスノメソドロジー、参与観察、フィールドワークなど、多様な方法が研究目的に応じて用いられる(フリック, 2002)。そのため、コーチングに関する実践知を明らかにしていく研究においても、唯一の研究方法が存在するわけではない。

また、「ひと」を対象とする学問は、「もの」を対象とする学問とは異なって、対象と主体とのあいだのはっきりとした截断を前提とするわけにはいかない。そのために、学問の主体はけっして対象から独立的に超越した普遍的な主体というポジションをとることはできない(小林, 1994, p.6)。そこでは、主体に応じていくつも真理があり、いくつもの異なった記述の体系がある(小林, 1994, p.11)。

これらのことは、コーチングに関する実践知を明らかにする研究では、さまざまな研究方法、さまざまな記述方法が認められることを示している。しかし、研究成果が学術論文として採択されるためには、研究の科学性が保証されていなければならない。では、ここで保証されるべき科学性とは何だろうか。「研究者自身が、主張するのに都合のよい事例を恣意的に選び、解釈している」と批判されないように論文を書き上げるために、どのような手続きが必要なのであろうか。

私は、実践報告と事例研究における科学性は、そこで示される知見が妥当性や信頼性を持っていることで保証されると考えている。すなわち、実践現場のリアリティを正確にとらえられる方法で、リアリティを正しく反映している結果が得られること(渡邊, 2004)が重要であると考えている。

妥当性は「見ようとしているものを実際に見ている

かどうか」という点に要約される。科学的研究では、データの妥当性、すなわちデータが研究の対象である現象を正確に代表し、把握しているかどうか重要な問題となる(Hycner, 1985)。実践報告と事例研究では、データの妥当性は、事例に関する多面的な情報や状況の詳細な提示によって高められる(杉村, 2004)。また、主張の妥当性は、データから主張を練り上げる過程を具体的に説明することで高められる。ここでは、研究結果が実証的なデータに基づいているかどうか、研究対象の特性に照らして、方法が適切に選ばれたかどうかの2点から評価できる(フリック, 2002, p.9)。

信頼性に関しては、何度測定や分析を繰り返しても同じ結果になるかどうかという意味の信頼性は、実践報告および事例研究では採用されない(フリック, 2002, p.275)。一貫性と安定性を持っていることが信頼性の基準になるのではなく、研究方法の確実性や正当性が研究の信頼性と位置づけられる(渡邊, 2004)。具体的には、どれが調査者の行ったことで、どこから研究者の解釈が始まるのかがチェックできるような形で事例の成立過程を明らかにしておくこと、提示された事例の解釈の方法を明らかにしておくことの2点が、信頼性を高めるために重要となる(フリック, 2002, p.275)。

次章には、実践報告と事例研究における科学性を保証するための手続き、論文中に記述されるべき内容について、私の行っている質的研究の手続きを援用して説明する(具体的な記述方法と内容については、會田(2008)、會田・坂井(2009)、會田・船木(2011)、會田(2012)、會田・富本(2012)を参照)。

VI. 実践報告と事例研究において記述されるべき内容

1. 事例を提示するまで手続きの明示

実践知を対象とした研究では、自然科学系の研究のように条件を統制することが不可能である。質的研究では「他の研究者がその調査研究を行ったとしても、同じような結果が得られる」(桜井, 2005)という意味での信頼性は問題にされない。むしろ、調査者の特徴や調査方法の違いを積極的に認めて、それらを明確な形で伝えられること(桜井, 2005)、提示される事例がどのような過程を経て得られたのかを詳細に開示することが重要である。具体的には、いつ、どこで、誰が、どういった事象を対象として、どういった視点から、どのような手法で調査したのか、主に内省によっ

て得られる調査内容をどのような方法を経て事例として提示したのかについて明記することになる。このように、事例を提示するまで手続きの透明性を高めることによって広い意味での反証可能性も担保でき、他の研究者やコーチが得られた知見の有効性や限界を判断できるようになり(西條, 2009), コーチの学びに生かせる情報にもなる。

2. 省察された内容の外化

自分自身のコーチング活動を内省する方法であっても、インタビューなどで他者のコーチング活動を対話的に内省させる方法であっても、省察された内容を事例として外化(山崎・三輪, 2001)する手続き、すなわち自分自身の思考やインタビューで得られた語りなどを、客観的に見つめ直せるように文章や図表に表す手続きが必要である。それが行われない場合、研究者の主張に必要な言説だけが考察の中で調査結果として示されることになり、論文の科学性は著しく低くなる。例えば、熟達したコーチにインタビュー調査をした場合には、インタビューで得られた語りの内容をまず事例(結果)として示し、それに対して、研究者の独自の視点や先行研究で得られた知見を利用して考察する必要がある。つまり、どこまでが対象者の省察なのか、どこからが研究者の分析や解釈なのかを、他者が判断できるように明示する必要がある。そうすることによって、実践の説明と解釈の精度を高められる。また、他の研究者やコーチの反証可能性を担保し、開かれた省察への手がかりになる可能性が生まれる。

3. 事例に関する厚い記述

個別事例の研究で明らかになる実践知は、厳密に言うとうと、本人にしか当てはまらない。しかし、事象が直接似ている度合いが高く、事象の構造が似ている場合、実践報告や事例研究で得られる知見は、類推によって転用可能性が高くなる(西條, 2008)。個別事例を対象とした研究で明らかになる実践知は、「目の前の選手にも当てはまるかもしれない」とコーチが類推できるように「厚い記述」(西倉, 2005)で明示できれば、すなわち状況をまったく知らない人でもその行動がよく理解できるように、行動そのものだけでなく文脈も含めて説明できれば、コーチングの実践現場において有用な、次の世代に伝承できる知になる。

4. 事例の解釈と理論構築

実践報告や事例研究からコーチが活用できること

は、事例を解釈する中から選び出された「チームや選手が違って共通すると思われること」である。これが他の事例とも共通することが明らかになったとき、一般性をもつ理論の構築が可能になり、個別事例の提示を超えた事例研究として位置づけられる。事例研究は、特定の事例から出発し、その事例に寄り添いながら、しかしそこにとどまることなく、研究者の視点を活かした現象の記述やモデル構成などを行う方法である(杉村, 2004)。対象の数が少ないがゆえに、明らかにしたい現象について多くの項目をとりあげ、深く調べることができ、対象が生きて動いているさまを、状況から切り離すことなく、時間を追ってとらえることができる(杉村, 2004)。たとえ研究対象が一事例であっても、現象の見え方が変わるような視点を提示できたり、よりよい実践につながるモデルを構成できたりすれば、価値ある事例研究になりうる(西條, 2008)。

VII. おわりに

私は、今回行われた「コーチング学研究」の投稿規定および投稿の手引きの改訂は、コーチング学における研究のあり方を変える転機になると考えている。事例の個別性や特殊性に焦点を当てた実践報告や事例研究が、さまざまな研究者やコーチに受容され、「普遍性というよりは公共性という意味での一般性」(鯨岡, 2005, p.41)の要請に応えられるように実践現場のリアリティが明らかになっていくことを期待している。

熟達したコーチには、選手の育成という本来の役割に加えて、次世代を担うコーチの育成という役割が加わる。膨大な経験を積んでいる熟達者は、状況と行動とを結びつけるのに分析的な原則に頼らず、一つひとつの状況を直観的^{註1)}に把握して正確な問題領域に的を絞ることができる(藤原, 2012)。熟達したコーチの直観的把握力とその形成過程については、コーチの学びの教科書になる。熟達したコーチにコーチングに関するライフヒストリーを振り返ってもらい、重要な出来事や行動とそこから得られた教訓を明らかにする研究は、コーチング学において重要なテーマの1つであると考えている。

注記

- 1) ここでは、観たままの様子から対象全体を把握、認識する直観力が強調されており、感覚的な直感とは異なる(藤原, 2012)。

文献

- 會田 宏 (2008) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに. 体育学研究, 53 : 61-74.
- 會田 宏・坂井和明 (2009) 国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例研究. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 56 : 69-76.
- 會田 宏・船木浩斗 (2011) ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに. コーチング学研究, 24 (2) : 107-118.
- 會田 宏 (2012) トレーニング科学において事例を研究する手続き一球技における実践知を対象とした質的研究を手がかりに一. トレーニング科学, 24 (1) : 3-9.
- 會田 宏, 冨本栄次 (2012) 卓越したセンタープレーヤーにおける1:1の突破に関する動きのコツ. ハンドボールリサーチ, 1 : 17-23.
- 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤 学 編 (2005) 教育研究のメソドロロジー. 東京大学出版会：東京.
- ベナー：早野真佐子 訳 (2004) エキスパートナースとの対話—ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理. 照林社：東京.
- ベナー・フーパー＝キリアキディス・スタナード：井上智子 監訳 (2005) 看護ケアの臨床知—行動しつつ考えること. 医学書院：東京, p.28.
- 藤原裕美子 (2012) 第5章人を相手とする専門職2 看護師. 金井壽宏・楠見 孝 編 実践知—エキスパートの知性. 有斐閣：東京, p.206-207.
- フリック：小田博志ほか 訳 (2002) 質的研究入門—(人間の科学)のための方法論. 春秋社：東京.
- 浜田寿美男 (2007) 虚偽自白の心理学とその射程. 認知心理学研究, 4 : 133-139.
- 浜田寿美男 (2010) 現場の心理学はどこまで普遍性をもちうるのか：渦中の視点, 観客の視点, 神の視点. 日本質的心理学会第7回大会 大会プログラム抄録集 : 21-23.
- Hycner, R. H. (1985) Some guidelines for the phenomenological analysis of interview data. *Human Studies*, 8 : 297-303.
- 金井壽宏・谷口智彦 (2012) 第3章実践知の組織的継承とリーダーシップ. 金井壽宏・楠見 孝 編 実践知—エキスパートの知性. 有斐閣：東京, p.65.
- 小林康夫 (1994) 学問の行為論. 小林康夫・船曳建夫 編 知の技法. 東京大学出版会：東京.
- 鯨岡 峻 (2005) エピソード記述入門. 東京大学出版会：東京.
- 楠見 孝 (2012) 第2章実践知の獲得—熟達化のメカニズム. 金井壽宏・楠見 孝 編 実践知—エキスパートの知性. 有斐閣：東京.
- 村木征人 (1991) スポーツ科学における事例研究の意義と役割—コーチング理論と実際の乖離撞着を避けるために—. スポーツ運動学研究, 4 : 129-136.
- 無藤 隆 (2004) 研究における質対量. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.2-7.
- Nicholls, A., Holt, N. L., and Pollman, R. (2005) A phenomenological analysis of coping effectiveness in golf. *The Sport Psychologist*, 19 : 111-130.
- 西倉実季 (2005) 厚い記述. 桜井 厚・小林多寿子 編著 ライフストーリー・インタビュー. せりか書房：東京, pp.161-162.
- 小田博志 (1999) ドイツ語圏における質的健康研究の現状. 日本保健医療行動科学会年報, 14 : 223-239.
- 西條剛央 (2007) ライブ講義・質的研究とは何か SCQRMベリック編. 新曜社：東京, p.10.
- 西條剛央 (2008) ライブ講義・質的研究とは何か SCQRMアドバンス編. 新曜社：東京, pp.102-110.
- 西條剛央 (2009) 研究以前のモンダイ 看護研究で迷わないための超入門講座. 医学書院：東京, p.43.
- 斎藤清二・岸本寛史 (2003) ナラティブ・ベイスト・メディシンの実践. 金剛出版：東京.
- 坂入洋右 (2011) コーチング学における新たな応用的研究の可能性—包括的媒介変数を活用した実践的研究法—. 体育方法専門分科会会報, 37 : 169-173.
- 桜井 厚 (2005) 第1章ライフストーリー・インタビューをはじめ. 桜井 厚・小林多寿子 編著 ライフストーリー・インタビュー. せりか書房：東京, pp.48-50.
- 杉村和美 (2004) 事例研究. 無藤 隆・やまだようこ・南博文・麻生 武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.169-174.
- 渡邊芳之 (2004) 質的研究における信頼性・妥当性のあり方. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社：東京, pp.59-64.
- 山崎 治・三輪和久 (2001) 外化による問題解決過程の変容. 認知科学, 8 : 103-116.
- 関子浩二 (2012) 体育方法学研究およびコーチング学研究が目指す研究のすがた. 体育方法専門分科会会報, 38 : 11-17.

